

Centimetres

KODAK Color Control Patches

© The Tiffen Company, 2000

Kodak  
LICENSED PRODUCT

Black

3/Color

White

Magenta

Red

Yellow

Green

Cyan

Blue

繪本自來也說話

前編  
壹

1910  
1  
遠 13





門 遠 13  
番 1910  
1-11

感知亭鬼武著  
高喜齊校合

# 繪本 自来也說話

大阪書林 岡田群玉堂



近世稗史小說行。而文人詩客各玩之。措几案。傍  
世人傲頓卑。而欲續<sup>上</sup>萃人之稗史小說。不慣文辭。  
則其義難通。故續<sup>下</sup>記。本邦忠魂義膽貞女烈  
婦之事。傲小說者。慰雨消暑。是以坊間書肆。爭  
就作者。徵其書。以鑄<sup>上</sup>梓。故作者亦如雲。互競其巧。  
是以作者巧拙相爭。猶群猿攀樹。各指其尻。以  
笑也。余与感知亭主人相<sup>下</sup>驩久矣。今茲乙丑暮春。  
偶同友人。賞花於墨水。歸途出于<sup>上</sup>淺草。以舊  
誼訪感知亭。雅談移刻。遂出<sup>上</sup>所著自来也說

話者請序其端。時余將有遠行。且朱輪輾西。不遑續了。乃畧聞其事。強乎惡者。復強乎義。古人之言不誣也。自來也者。綠林之豪客。然其終歸義。頗有懲勸之捕。主人著一片婆心。編此書。使讀者為太上感。應篇云尔。

蘭洲東秋賦識



ヲガタシウマヒロコキ  
尾取周馬寛行

イソウ  
異名自來也



尾取周馬寛行

衣重ソエ 且清野マタキヨノ 後早杖カサダ



萬里野破魔之助マンリノハマノスケ 保利マサキ



勇源イサミケム 太郎タロウ 正村マサムラ

假速水雅次郎  
 勇侶吉郎 正輝  
 カリニハヤミマサキチロウ  
 イハニトモキチラウ マサテル



美鳥

鹿野苑軍太夫  
 復五十嵐典膳  
 後鬼首剛右門  
 カクハランガンダユウ  
 マタ イカマラン カゲクニ  
 テンゼン  
 ノチ ラニサウベハウエモン



鹿野苑軍太夫  
 復五十嵐典膳  
 後鬼首剛右門

報仇くつきうち  
奇談きだん

自來也說話目次

身一卷

○ 勇正村来由いさこまさむらうらゆ併あひ衣重いぢり貞操まこと条じょう

○ 喜樂きらく并あひ横死よこじ併あひ自來也いらいや助すけ孤子こし冬ふゆ

○ 勇正村いさこまさむら討う拂はら併あひ推津國おしづくに久ひさ拍は条じょう

身二卷

○ 正村まさむら景國かげくに為な同役どうやく併あひ自來也いらいや詮義せんぎ条じょう

○ 名越なご長兵ちやうべい清女しやうにょ兒こ正村まさむら為な養女やうにょ併あひ自來也いらいや遺而いじり

弘ひろ擲な押お自來也いらいや同どう併あひ以も智破ちぱ囚い獄ごく条じょう

身三卷

○ 勇正村いさこまさむら逢あ衣重いぢり併あひ景國かげくに謔言ぎやくげん条じょう

○ 正村まさむら衣重いぢり復ふ拳こぶし併あひ速水すみずみ雅次郎みやじらう条じょう

第四卷

○五十嵐曲膳與朝妻歌之助比試併速水

雅次郎水練条

第五卷上

○自来也名加邑晋秀家族入併天眼破等傍与

夜及嵐相撲条

第五卷下

○鏡浦復讐併勇侶吉推津泉為臣下条

報仇

自来也説話卷之一

武江

感和亭鬼武著

高喜齊校合

勇源太郎来由併衣重貞操条

善不積不足以成名惡不積不足以滅身小人以小善為

无益而弗為以小惡為无傷而弗去とハ周易下繫の

辭傳也此小往昔信濃乃国伴那の邪麻綾お里に勇源太郎

正村とよとのありそ祖先ハ武切乃家まで代々足利の幕下

村上家子は下が祖交代頃より所の決まりあり民間に

今ハ古民と稱りハ里子位ありるが親ハ利根友一そ昔承



七旬しちじゆん近ちかく妻つまを衣え重おもくよく二十余にじゅうよ容ゆる顔かほこもよ  
 殊ことごとく二ふた支えの男おとこ子こ一いち個ごのり名なは侶りよ吉きちとよよ然しかるる源げん太た而り  
 之これ如ごとく文武ぶんぶの道みち不ふ志ししし孝こう乃な者もの者もの子こていいるる歳さい  
 三十さんじゅう五ご歳さいは血ち氣きは力ちからの形かたちきども近ちか来きハハ不ふ作さく打うち續つづ  
 終つひの田でん畑へつハハ管くわん民みん招まねふふれ強つよ少すく地ぢ耕かう作さくしし親おや子こ四よん人にん  
 暮くの母はは子こ文ぶん武ぶ乃な乃なも金かね不ふ保ほそそ百姓ひやくしやう三さん昧まい子こ精せい力りき  
 をいいふふとといいてても朔しやく夕しやくは煙けむりも終つひくくちちああれれててああのの心こころ  
 年とし々々租そ税ぜいの未ま進しんも洋やうぬぬききをを國くにの政せいの縣けん令れい廳てい子こ  
 百ひやくれれ弘こう明めいは上かみ多おほくく急いそ者もの進しん相さう遠えんのりりささぶぶ曲まがをを  
 ありありととつつみみふふ囚おと獄ごくは身みとああんぬぬ形かたちりりししららばばあありり

残のこの親おや喜き樂らく計けい妻つまの衣え重おもかるるととも暮くるる如ごとくくびび這こ者もの  
 口くち情じやう次じ才さいりり身み性じやう古こハハ由よし有ありり士しはは仍なほくく落おち視したたききををとと  
 又またぐぐれれ令れい子こ不ふ語ごりり憂うれ目めををここららととせせたたりりれれ志しくくハハ  
 何なにれれとと令れい子このりり由よしババ深ふかをを所ところの艱くわん苦くをを救すくわわすすもも侍し  
 加かへへ一いち終つひややせんせん角かくややとと想おもへへもも老らう人じん女にょ子しのの術じゆつハハ  
 一いち令れいのの也なりももああるるををれれどど妻つまハハ舅きゆう在ま在ま計けい不ふむむららむむ  
 中なかややりり加かくくぬぬりりもも高たか世せのの約やく速そくととハハ申まをぬぬるるもも眼がん前ぜん  
 夫おと乃の疑ぎふふ或ある妻つまのの身みととててよよききふふららんんもも乃の子こららむむ  
 むむららりり親おや夫おとののああららむむ身みをを賣うりり艱くわん難なんををああららむむのの  
 士しののああららむむををたためめ一いち如ごとくくももああららむむ妻つま不ふ来きたた



生れあれども何れも怪現勅許さるも身をさす可免  
 中さんあそ身乃代をとりて未巡を供ひ夫乃親を  
 救ひ取れしと打歎きぬれむ在赤跡も泪子むせむ  
 結も中せりあのうきも其んはうざる中らあうねども  
 汝がん姉も汁くぬぐ思兒子原を帝も彼令難そ  
 法うとも武士の罪あれは妻小勅させんこと踏念  
 ありおありらん我とも嫁子身を賣るせんそも  
 口おしと云あう妻乃身とてハさ形くそハ加さる  
 がるるところ天晴負操乃志一感はる余りあり  
 何あり汝が申ぐ先城の難美形手ハ誓一の内

海川竹子身を沈めあハ赤太帝が難美ハ嫁さう想へどもあ  
 一ツ中を孫侶吉ハいまぐ二女の嬰児形れむかき此赤赤育男の  
 身そまきいんまを望や侶吉うるとも延連くまも形れ  
 ありとありうそそ勅せる身に嬰児拘へ足も纏子おに育ハ  
 あくそまきごも身代乃内をりて少一の合子を添へいらあ白  
 ころも誓一のうち取たぬうそそまきも先きまるこころあ  
 這等お事る夫出家れううそそ結き子高儀あ一  
 結きまきいんま大人の山苦方あぐる苦しい乳押して中  
 ころも誓一なるそそ親お中そそ子も捨孝行もあ  
 屋敷家のいんまを真取れそそ現をその男に赤子



信濃国  
麻績之  
里之圖

自來也説話卷之一

事のついでにさるる 逆事の不幸乃罪の宿させ玉へとおく打  
 倒る驚き果しもあるを存命併せせける涙をおさ  
 委細小つ届きうけ上は泣ぬく世子勅させる一条さん故  
 定めん一日も老早源大高の難をまらひ涙さへ一勿海はら  
 嬌容まで奪え雨三身も身を流ぬるに夫乃囚獄も免れあん  
 光陰ハ矢のどく傾く月歩さう驚くぬ女夫打揃ひいゆ此  
 難儀と打うかるととぬぬだ復源を祈りし出字は  
 うへを尋ねて送るるぬんが先世身を愛する所は何ん  
 こぞよりとせ近地つとてハ知音もつろくわけてせせぬを  
 夫の仲間もハハバとささうと法と隔ある越後乃國

彩深の港ハ懸花地形れをたぬハ付いそやと親子商儀  
 調ひ夫より旅此精怪卒おふ一近遠へを源をのぬふ  
 合子也是し出ると傳へ喜樂跡ハ侶吉成抱地親子二個  
 未明子位割一麻績乃里を立出ぬ唯さくは地旅多ふ  
 ありてや其文を流めんそと憂容路もせ強り  
 喜樂跡横死併 自來也助孤子条  
 快も在示跡を衣重侶吉を惹連四十余里の道を志地  
 越後の国蒲系乃形勢に淡子到り少ハ知音有りぬきを  
 傳ひを未く同所中道住屋付七といふ寓家へ娘夜を  
 飯賣女子なるをさせそやと商儀調ひはが三年乃の季

きて合口二拾兩に賣渡し一又く孫侶吉ハ森宗跡此懐子  
 抱既既身列きあんとせる時夜守ふあうぬ旅路小身を  
 賣るゝたあま子親夫赤子あもまをり列りるぬれを出さ  
 けらさふも世もあうまに計時びく今世一と列れを惜み  
 更に果しもまぎれハ森宗跡もまめく宥賺連もおつと力  
 多免ふ身を泥し一六一刻も老早世合をりて涙をらを殺む  
 いづせむ汝が負んも届た且逕子涙を帝も南西へつら  
 安否をもつせんとも強くも振捨く嬰兒抱き新浮乃  
 涙を立出る頃も秋の寒中あういとわびじ地旅此宮  
 森宗跡を彼合子あて涙を帝を一日も老早助んと志と

されど老足のは果ありん懸くぬぢりぐまに不淋や  
 ち泊といふ野跡乃間に流比古山とく一里余此峠あま  
 世所之阪あふ流彦明神乃社ありて大木森くと生茂り  
 南ハ穂摘が浦しとあり満くある海上北ハ大山嶽とく  
 岩石聳へたあだおまけはるき書上剌形とくし  
 流一ヶ所りものまて物寂寞山中あま子疾日も西山  
 子落入バ喜赤井ハ寺泊不寓を求んむやとんハえぬと  
 いへとも難所乃峠子歩行くころ乃足根彼不のふあし  
 腰打拭やましくひたさるうら日も暮るむびぬれば秋乃  
 半悲月ハ冷く子ぬれども木の百隠れに幽寄く茶後子

人も形く青あふとのを夜お浪乃とあくといとどワビに  
 折社所被傍乃林の中よりももろ葉如記大漢子月代をく  
 延きく腰み大ざら流身を指し形一考るが喜楽社此の  
 形お出老人の夜乃乃嘸難義りお出ん送るも  
 せんと近きさゆふ喜楽社扱ハ這奴社山城ある何卒  
 賺しゆめ此難を避むやと想ひ承ゆる看取ごとく  
 小貝と抱地夜中形及と難候あれども近地りるおあ  
 め目ぐは山坡も海ひ馴さの并苦あも思ひ傳るべ  
 らももる津の街子所用ありくおあるとおありま  
 日とられて伝れど形き路故淋くもおぼくはるる

過往難信くもろもあが格別難取乃苦く忘れ申さん  
 在ゆを同傳中あくはども赤い疾あれ子へあるをよさふ  
 到り今春の彼赤子止り傳れば残念あぐら連中あり  
 加一免さゆへと足疾子行るる看後より法言腰力  
 扱よとく一が喜楽社の首先四五寸啖喇喇断老人の  
 呼と云さぬ抱き一雅兒取落せんと山上より舌底へ  
 顛到り墜きりしが中程まで木の根子总扱乃袖撒りて  
 小貝ハ下へ墜もやうん泣叫ぶ長赤糸ハ腰子帯せ  
 相に形短刀扱持やとれ山城比負りの菓とても  
 往古ハ名子遊心武士の果あるぞ汝等とてお白々と



日本書紀卷之十一

自美七言詩卷之一

喜々齊  
 横死の  
 圖

討きんやと始乃手麻を事共せび甲斐  
 切捨るも血氣乃山賊刀を原未寸延あり當一討と  
 きたりぬれど手利此老人一往一來勇伐奮ひ透り  
 つらせば切あくらきか此盜賊ハ會釋兼送逃不を  
 跟込く強子力をお落せむ遠去叶いと逃行髪柄  
 捕く着交法氣此老人短刀送手に取直一柄も拳  
 も通れよと脊骨より物元へ突せぬ狂回く盜賊ハ  
 道の谷に落ちると何れ何れ此間子らハ脊後よりあ  
 一個の盜賊別れ抜足して觀着奇存余此頂上  
 より洞後追刀をばさしと突く流石の老人ああり

ぬび七顛ハ倒沼田打狂を起りあてび止乃口絶くせ  
 指通さきむゆんと汁やと云死子然の露と浴ぬるあれ  
 果光景あり盜賊ハ前後を詠免家僕が不甲斐又心  
 老老の強勢は非子及ぬ罪造りと懐中を捜す兩此  
 金を奪ひらち飢味己此命を必く身代を問へる  
 去りまらう今一せよあさむやと獨言して遠よん配  
 傍乃岩間に泣入る小兒牙眼をつけ梁も後日の妨免殺し  
 捨んばあのとちあんとを折柄脊後乃あさう打地  
 許多地連おこれ同勢あさむるさあ子南法三かむりあれ  
 くらりあさむりしは貴一個捨るあさむりて糧乃餅食す

あろうさあくと、飢死せんは必定と、山小點を俵に打  
ちて何回ともあく、悲夫なる長むな、一衣帯か、臭ん  
去、赤子けん死すて、咄、仇りすと、ぬめると、そ、非、形、を、就

這ふ、頃、三好、家、乃、浪士、尾、取、因、馬、定、行、と、り、子、力、の、あ、る、と  
其、身、武、術、子、熟、練、一、忍、術、を、以、ひ、つ、と、如、く、法、盗、の  
強、幸、と、あ、り、て、許、多、お、小、賊、を、従、へ、所、く、法、盗、子、押、入  
ど、も、負、家、あ、る、賊、観、く、身、黄、金、を、よ、へ、買、る、お、お、と  
忍、乃、く、大、金、を、奪、ひ、取、て、お、毎、に、自、来、也、と、札、を  
張、き、く、立、寄、り、形、く、お、る、と、そ、お、お、あり、ぬ、お、お、を、以、人  
年、ん、く、自、来、也、と、稀、少、あ、る、子、つ、お、に、監、獄、乃、法、帖、

自、来、也、と、い、わ、呉、え、を、ぞ、ぞ、り、あ、り、る、四、の、守、り、も、は、自、来、  
也、乃、詮、義、者、重、あ、れ、ど、も、奇、術、を、以、く、文、を、隠、せ、を  
中、く、石、捕、事、難、く、且、自、来、也、ハ、大、擔、お、敵、乃、忍、せ  
こ、の、形、れ、を、お、お、の、詮、義、者、あ、る、と、も、お、お、想、ひ、ん  
五、次、お、お、先、列、あ、く、所、く、お、お、換、入、即、晚、も、石、瀬、邊、お、  
お、お、お、お、お、お、大、金、を、奪、ひ、小、賊、子、救、の、灯、地、お、お、お、  
お、お、お、お、お、お、山、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、  
小、兒、乃、泣、声、頻、子、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、  
赤、子、の、声、可、お、謂、あ、一、不、審、さ、お、と、小、賊、子、分、談、を、  
お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、



トらのヤ  
自来也  
ミヤーニタラ  
助  
孤  
圖



自来也説話卷之一

①

自来也説話卷之一



②

儂乃谷間子ハ幼児の亦乃根子掛り泣き居るさぬ不使の情起  
ぬ身をも自來也彼小兒を助け寺せ抱取何所の誰か児ある  
うハあつされども使なき光景定て小成れ仕業やもあるやん  
老人も今更悔とも是非も解一唯小兒のこゝと助けぬせん  
と懐たに死入れ灯籠遺と道をとやれ己が住家へを連行ぬ  
折自來也の住所とつを越後地国境まで信濃の庄に黒姫  
山といつる所 遠山中ハ廣く荒れを築た平日こゝに住して  
奢る者も黄金を丸ハ法を以て法益成りたれば自來也  
拾ひ小兒を連れ歸り旅々々々眼ハ威り何となく赤色  
くろくく 健れおれ生れさうさうと涙ぬふさう泣き居る

強付ありぬれをえれを冠にる中にも父由諸去ありて源太舟  
正村と子の兒子勇侶吉所といつるまで明白なりとすバ  
何卒親えへ返し遺人と想へども何れも者といふ事も成  
親乃生子もさうさうせよハ先系方まで成ひ育ぬ使且遠  
山まゝを夜明け所の者森手掛れ死骸をとりけおと願主へ  
海へ換便乃縣吏まゝと死骸をとりてある國所の書付  
つめれ右北沢成信員へ扱合森手掛乃亡骸は遠なる  
おら上るまづ飯ふさうおせしとせ

勇正村村神 併 権津国人は拍条

勇正村村神

於て信及麻績の里より長糸舟横死の事字へ傳れハ村の  
 カのともおち高義をいへるハ素より源太師ハ篤實孝人  
 者於れ大困窮乃余りせんまて祖税未進も嵩如  
 二つ好身不使の以て孫子今度釈在糸舟地  
 者より一向方より獄舎の上ハ何きば方よりもまうりて授換  
 せへ地子あきハ村役と想ひ村落まで一太師此未を借  
 獄舎より助出—巡り源太師彼地へ遺—まば孝人の  
 源太師親此墓詣まて—復向方のいひまも夫まで  
 事を謀—ぬんと一交—て金を潤—右の始末以縣令廳へ  
 於ては太早同罪ありて源太師此囚獄を定され村落へ

如きまらる然る子源太師ハ此動静を聞ありも天に信地地子  
 憂愁ふまへハ奈何ある訳も此後路を形—子逢糸舟妻  
 子此舟もまきされ—十方子くねるが先何うは金並か此  
 地に到り—此動静此と伝へ此始末村落へ控を速取旨  
 旅糶—事此後のも—と意地此此山子到り所の者に子細を  
 尋る—一向小動静—と—ハ此糸舟此亡般ハ堂上寺に葬—と  
 せ—此動静を傳へ父乃埋れ—換乃年於此の例子—と  
 生—人子事—と—不孝の兒子身此貪此子引れ親人子難を  
 子引—人子事—と—糸舟—と—奈何—此—ハ未知—と—子の—と  
 —と—此—大事に—事—建—圍—と—為討—の—と—せ—と—此—口惜

さよは上き何国乃誰り知れぬとも敵の行跡捜未の便不敷天の  
 讎を討修羅の命執時させ申さんと定意に泪玉を誑香花  
 手向て七三日の夜中を立敷此功を放き一とを如く殺ひ  
 冊たてて所りぬ世頃當國の城主推津國久入小乃行列多  
 一其身の馬上まで僻静と海彦の峰はさるりぬ折り  
 俄子暴風吹来り大木を吹倒り勢ひ多て砂石を飛ばさる  
 同勢を子と起さるれ一歩も行事終つて小乃乃馬も  
 勢地懼く進めぬ途まづ形一固志づ一木折り立る  
 折葉原をあり林葉下りり香花をたぬ事とんと此所を  
 通り金せ一た風の傍一盛子吹くて峽を一むらむ徳掛と

又へりるが途りい志起寄秋おとく膝く膝くとりて目指も去れぬ  
 物凄さ這也何事と國久乃供廻勢地強ぐそ西北の小木は  
 方よりもささと吹来り風おつれ岩石大木とありと寄る波つて  
 其丈凡一丈余もつらめと想へる是形乃りの推津が同勢の  
 中へ踊り入り身む果事社と衆皆驚慄右性左性は  
 逃散る成式多引裂捨倒一此かた先に手負者其教を  
 走るるべ形りく馬圓乃士刀指物逃れ鞘拔け主人の  
 あらうと身付と働とも彼者の飛をのぞく陸も刀を奪ひ  
 そり板は板中も已子危くするを又小原を前ハは神を懸り  
 いまの父の足中といふあがらうり人おやああるを足捨全



三勇正村  
討狒圖

自撰七言話卷之一

中を形く又家身とても是く進退此子極る不なきハ那る  
 化を仕留んと觀着奇回もあふこそ是形のりの、荊棘の叢を  
 揺乱し眼の光り赫くと涙大帝目掛跳るるをんはさうと  
 跳遠さ毎腰劔抜て丁と切れとも物身鉄針のどれ毛生て糸を  
 清附ぐ皮一重も切込ざれば彼者倍く妙り或形一義子とん  
 ぬち引列衣んと跳るるを涙太所も一世此大事と那者の  
 眼に毒をほけ抜け澄り川二三度四五度意外せむ変化ハ  
 焦燥削るるも光り輝く眼を觀着て突がる切先不遇  
 是形のもの半眼乃中へ突込さうはくれて変化ハ狂い猛り山鳴  
 震動夥數眼中より流るる血汐を振らゆ大口明て食ひうるを

涙ありと刀さる車一是形の者此咽中へ拳も通れと突込は這よの  
 曲者作ちねハ一山鳴動大木折折凄じかやと家光景ありされ共  
 変化を懼声音きて呪う先だか〜切りて之ぬれむ法手と差組  
 捕く押へ眼をあげて突込〜終子仕留さうに身も其怪集  
 諸共に倒すかりしふか今迄を傷〜雪も常も忽晴く風も強く  
 かと此晴天とぬぬバ推津反涙を帝乃動靜を觀みひけれ  
 助よとあるあ〜に逆習志士もあて氣付を吞せ水を鳴け  
 押せる子世じそ涙を引ハん付透る或涙人〜此介抱を  
 看く這者帝〜と一被速れを衆皆打あ那是形のもの衆  
 する子長ハきを丈四五尺あり〜頭を浪汁の如た毛生ハ

自來也... 卷之一



国久しくくわも父の鱧中を候子天を不判乃美を  
 仇討の心算先至極さうねぐ説話乃動静を教何國の  
 誰ともあきひ面作も足定との事あねむ何本を馬子捜求  
 なる手術もあま一 昂子侍あねむ一先昂がほえ一  
 同伴あ一元の武士に立之了 曾一の内國乃海軍も備候し  
 得させねば仇討お暇を何と年々も遺はく怒るハ  
 士とめて敵も中近務負成せんと亡父も中定り想ひ  
 げ一と及理をせやての教訓も源を中呼と低評年々一  
 い一く世上の命子随ひそらう選ふ供あし西もえ一  
 らんと申を太早乃得ん後とせりそれく衣法を改先  
 ゆさせうとわりぬねバキく小運いて英教をと着させ指考力  
 大小路り旅籠の安とめり供育乃人教ふ加り一三三勇  
 友人品骨物勇源を正村が出世乃首途をいさ命一印

自來也説話卷之二終



